



華椿系の山と水

展示室：特別展示室

期間：令和3年6月26日～8月15日



指 定	作 者	作 品 名	制 作 年	材 質	規 格	備 考
	きょくてい いぼきん 曲亭馬琴編 わたなべかざん 渡辺華山画ほか	げんどうほうげん 玄同放言	文政元・3年 (1818・1820)	版本	冊子 全6冊	
	うえだもうしん 植田孟縉編 渡辺華山画ほか	にっこうさんし 日光山志	天保8年(1837)	版本	冊子 全5冊	
	渡辺華山	もうぶゆうきずかん 毛武游記図巻(複製)	原本天保2年(1831)	紙本淡彩	横巻 原本	常葉美術館蔵
	渡辺華山	ししゅうしんけいず 四州真景図(複製)	原本文政8年(1825)	紙本淡彩	横巻	原本 重要文化財 全4巻の内3巻
	たに ぶんちやう 谷 文晁	かげいさんすいず 夏景山水図	寛政9年(1797)	紙本墨画	掛幅	高林コレクション
	谷 文晁	こうしゅうぼうかくず 甲州望岳図	寛政12年(1800)	紙本墨画	掛幅	高林コレクション
	谷 文晁	せんざんぼんすいず 千山万水図	文化4年(1807)	紙本着色	掛幅	柴野栗山賛 高林コレクション
重文	渡辺華山	せんざんぼんすいず 千山万水図	天保12年(1841)	絹本着色	掛幅	
	渡辺華山	げつかめいきず 月下鳴機図(複製)	原本 天保年間	絹本着色	掛幅	原本 静嘉堂文庫美術 館蔵 重要美術品
	渡辺華山	こうしかんぼくず 高士観瀑図	天保9年(1838)	絹本着色	掛幅	
	渡辺華山	せいりよくさんすいず 青緑山水図	文政年間	紙本淡彩	掛幅	
	つばき ちんざん 椿 椿山	こうざん ぎらくず 江山漁楽図	天保10年(1839)	紙本淡彩	掛幅	為 安積良斎 高林コレクション
	椿 椿山	しゅうこうさんすいず 秋江山水図	江戸時代後期	紙本淡彩	掛幅	高林コレクション
	ふくだほんこう 福田半香	さんすい ず 山水図	江戸時代後期	紙本淡彩	掛幅	個人蔵
	福田半香 ひらい けんさい 平井顕斎	さんすい ずびょうぶ 山水図屏風	弘化2・3年 (1845・6)	紙本淡彩	六曲一双	
	やまもときんごく 山本棨谷	さんすい ず 山水図	慶応3年(1867)	紙本淡彩	掛幅	
	いのうえちくいつ 井上竹逸	しゅうけいさんすいず 秋景山水図	元治元年(1864)	紙本淡彩	掛幅	
	井上竹逸	さんすい ず 山水図	明治時代	紙本淡彩	掛幅	
	さいとうこうぎやく 斎藤香玉	りょくいんさんぼうず 緑陰山房図	江戸時代後期	絹本着色	掛幅	高林コレクション
	まつばやしけいげつ 松林桂月	とうけいさんすいず 冬景山水図	昭和中期頃	紙本淡彩	掛幅	個人蔵
	松林桂月	すいぼくさんすいず 水墨山水図	昭和26年(1951)	紙本墨画	掛幅	個人蔵
	福田半香	さんすい ず せんめん 山水図扇面	安政5年(1858)	紙本淡彩	額	
	福田半香画 はぎわらしゅうかん 萩原秋巖書	こうとうひつずい ちやう 興到筆随帖	天保13年(1842)	紙本淡彩	画帳	
	かぶらぎかく 鎬木華国	もほん さんかいきしやうず 摸本 山海奇賞図	明治29年(1896)	紙本淡彩	横巻 全3巻	原本椿椿山筆
	鎬木華国	もほん ししゅうしんけいず 摸本 四州真景図	明治29年(1896)	紙本淡彩	横巻 全3巻	原本渡辺華山筆
	渡辺華山	しんこう 辛卯稿	天保2年(1831)	紙本淡彩	冊子	個人蔵

指 定	作 者	作 品 名	制 作 年	材 質	規 格	備 考
	渡辺華山	華翁漫録 <small>かおうまんろく</small>	江戸時代後期	紙本淡彩	冊子	個人蔵 2冊
	渡辺華山	全榮翁漫稿 <small>ぜんらうおうまんこう</small>	江戸時代後期	紙本淡彩	冊子	個人蔵
	渡辺華山	寓画堂随筆 <small>ぐどうずいひつ</small>	文化年間	紙本淡彩	冊子	
	渡辺華山	癸未画稿 <small>きびがこう</small>	文政6年(1823)	紙本淡彩	冊子	
重美	渡辺華山	客坐掌記 <small>きやくざしやうき</small>	天保3年(1832)	紙本淡彩	冊子	高林コレクション
重美	渡辺華山	客坐掌記 <small>きやくざしやうき</small>	天保9年(1838)	紙本淡彩	冊子	

重文＝重要文化財 重美＝重要美術品
表記のないものは全て当館所蔵

谷文晁(たにぶんちょう)

宝暦13年(1763)～天保11年(1840)

江戸後期における関東(文人画)壇の重鎮(じゅうちん)であり、幕府の老中であつた松平定信(まつだいらさだのぶ)に重用されました。渡辺華山をはじめ多くの人物が谷文晁の下で学んでおり、絵の指導として中国絵画などを模写(もしゃ)させていたことが知られています。

渡辺華山(わたなべかざん)

寛政5年(1793)～天保12年(1841)

田原藩家老として活躍しました。絵は初め平山文鏡(ひらやまぶんきょう)に習い、白川芝山(しらかわしざん)、金子金陵(かねこきんりょう)、谷文晁に師事しました。实景に基づかない山水画を批判し、弟子への手紙に「山水は空疎の極みなり」と書いています。このため、現在残っている華山の山水画は少なく、貴重です。

椿椿山(つばきちんざん)

享和元年(1801)～嘉永7年(1854)

最初、金子金陵(かねこきんりょう)に師事し、金陵が亡くなった後、兄弟子であつた華山(かざん)の弟子になります。花鳥画で名をなした人物です。また、俳諧(はいかい)や煎茶道(せんちゃどう)にも通じていた人物です。

山本栞谷(やまもときんこく)

文化8年(1811)～明治6年(1873)

津和野藩(つわのはん)(鳥根県)で生まれ、はじめ同藩家老の多胡逸齋(たごいっさい)に師事しました。逸齋は栞谷の才能を伸ばすため、桜間青厓(さくらませいがい)の弟子にさせようとしていました。しかし、青厓は弟子をとらなかつたため、華山の弟子になつたといわれています。中国絵画的な人物画を得意としていました。

福田半香(ふくだはんこう)

文化元年(1804)～元治元年(1864)

遠州見附(みつけ)(静岡県磐田市)で生まれ、華山の弟子として椿椿山と双壁をなしました。半香は山水画を得意としていました。椿山の元に山水画の注文が来れば半香に、半香に花鳥画の注文があれば椿山に注文を回していたこともありました。

井上竹逸(いのうえちくいつ)

文化11年(1814)～明治19年(1886)

幕臣堀川(かじかわ)氏に仕えている武士の家に生まれました。竹逸は17歳から華山の家を出入りし、そして弟子になりました。山水画を得意としていました。また、長崎に行き、高島秋帆(たかしましゅうはん)の元で砲術を学んでいます。

鏑木華国(かぶらぎかこく)

明治元年(1868)～昭和17年(1942)

田原藩士鏑木家の長男として生まれ、華山の次男である小華(しょうか)に師事しました。渡辺華山の顕彰(けんしょう)につとめ、華山会を設立した際に常務理事に就き、また田原城二の丸櫓跡に華山文庫を建設しました。

斎藤香玉(さいとうこうぎょく)

文化11年(1814)～明治3年(1870)

10歳前後で華山に師事しました。華山は「妙品(みょうひん)に至るべし」と香玉を褒めるほどで、華山の愛弟子であつたと言われていました。華山が蜜社の獄で捕らえられた際、香玉は父親と共に華山のために行動しました。

松林桂月(まつばやしけいげつ) 明治9年(1876)～昭和38年(1963)

桂月は幼い頃より絵を好んでおり、また漢詩にも親しんでいたことから南画家を志しました。20歳の時に椿山に師とした野口幽谷(のぐちゆうこく)の弟子となります。後に南画界の重鎮といわれた人物です。68歳の時に国に優秀な美術家と認められ、帝国技芸員となりました。

田原市博物館